

学位授与番号	医博甲第1164号
学位授与年月日	平成7年3月25日
氏名	澁谷和郎
学位論文題目	耳小骨連鎖の可動性に関する研究

論文審査委員	主査教授	古川	仍
	副査教授	工藤	基
	教授	田中	重徳

### 内容の要旨及び審査の結果の要旨

種々の中耳疾患に対し手術を行う場合、個々の症例の耳小骨連鎖の状態を知ることは大変重要であるが、既存の諸検査では術前に十分な評価をすることはできなかった。そこでツチ骨柄先端を直接押し込み、この押し込んだ距離とその時かかる荷重を同時に読みとることができる装置を開発し、耳小骨の可動性について正常ならびに鼓膜穿孔耳を含む種々の中耳疾患に対し検討した。マイクロマン્યピューレーターに取り組んだ荷重測定器と変位測定器からのデータをグラフ化し、0.5~4gfの範囲で回帰直線を求め、傾き (gf/mm) を本研究のパラメータとした。

得られた結果はつぎのように要約される。

1. これまで不明であった生体における正常耳小骨の可動度を示すことが出来た。すなわち平均10.05gf/mm、標準偏差2.17を得た。
2. 鼓膜穿孔耳を含む諸々の中耳疾患における耳小骨可動度は以下の通りであった。
  - 1) 非真珠腫の慢性中耳炎では、鼓室硬化を伴わないものは10.16gf/mmと正常群との有意差を認めなかったが、伴うものは21.54gf/mmと固着性の有意差を見た。つまり鼓室硬化の有無によって耳小骨可動性は異なっており、本検査は鼓膜穿孔があっても明確に可動性の良悪を評価することができ手術の指標となった。
  - 2) 真珠腫性中耳炎ではたとえ連鎖が残存していても、上鼓室に密着した真珠腫被膜により可動性は障害されているため、14.58gf/mmと固着性の有意差を見た。また鼓室硬化症を合併するものは19.06gf/mmと固着性の有無差を、真珠腫による骨破壊のあるものは5.68gf/mmと離断性の有意差を見た。
  - 3) 癒着性中耳炎では可動性障害は諸群の中で最も大きく21.85gf/mmを示した。
  - 4) 耳硬化症では10.05gf/mmと有意差を示さなかった。これはアブミ骨底の固着がツチ骨の可動性に影響を及ぼさないことを示しており、耳硬化症はティンパノグラムA型が多いという従来の報告と一致した。
  - 5) 外傷などによる耳小骨連鎖離断群は5.07gf/mmと離断性有意差を認めた。鼓膜を介さず直接耳小骨の動きを評価できることから、鼓膜穿孔から再生鼓膜となることの多い外傷性の場合、本検査は従来の諸検査より診断能力において優れていると思われた。

以上、本研究において作成した耳小骨可動度解析装置は鼓膜の穿孔、非穿孔例を問わず、耳小骨病変の診断に有効のみならず、手術方針決定にも有用であり、中耳外科学に寄与する価値ある論文と評価された。